

職業としての心理学 －キャリア教育の視点からみた効果について

Evaluating the outcome of “Psychology as an Occupation” from a viewpoint of career education.

三 川 俊 樹
(Toshiki Mikawa)

問題と目的

1 「職業としての心理学」の位置づけと目標

心理学部心理学科の「心理学総合科目」（職業としての心理学）は、心理学部の特色ある教育として位置づけられてきた科目であるが、そのスタートは2005年度にまで遡る。

心理学部に改組される以前の人間学部心理学科には、「人間学特講1」という総合科目が設置されており、「特定の学問領域の紹介や解説をするのではなく、課題を中心に据えて、さまざまな学問分野からその課題を眺めることで、その課題についてのより総合的な理解を目指す」（心理学論集第13号における「職業としての心理学」の巻頭言より）という目標を掲げて授業が行われていた。その中で、2005年度の「特集」として「職業としての心理学」というテーマが初めて取り上げられ、9名の卒業生に講話をしていただいたことが「職業としての心理学」の始まりであった。そして、翌年2006年4月の心理学部の創設とともに、心理学部のカリキュラムの「心理学総合科目1」のテーマとして「職業としての心理学」が掲げられ、現在に至っている。

心理学部のカリキュラムは、心理学の高い教養を身につけるだけでなく、それらを自分の生き方や社会に役立て、心豊かに生きて自己実現を目指す人の育成を目標に編成されているが、「心理学総合科目」（職業としての心理学）は、「生き方確立の基礎」を形成するために「ライフスタイル演習1・2」と共に設置され、自分の生き方を考えながらその生き方

に応じた心理学の学びを選択することができるようになり、主体的・創造的に自分の人生を設計していく力を身につけるということが目標とされている。

2 「職業としての心理学」－心理学の学びを職業に活かすための視点を学ぶ

「職業としての心理学」は、本学の心理学科の卒業生および大学院心理学専攻の修士生を講師として招き、学部や大学院での学びや成長が、現在の職業や仕事にどのように活かされているのかについて、次のような観点から講話をしていただくものである。

具体的な観点としては、「現在の仕事の内容や、その仕事をするための資格について」「その職業や仕事についての経緯や、その職業や仕事を選んだ理由について」「今の職業や仕事に携わる中で、苦勞していることやうれしいこと」「学生の時の夢や希望と、実際の職業や仕事や社会との間にギャップはあったかどうか」「大学時代に力を入れていた活動や勉強などについて」「学生時代の経験で、その後の自分にとって大きな意味があったことは何か」「心理学を活かした専門資格を取得した理由について」「その専門資格を取るために心がけておくべきこと」などがあり、それぞれの観点から話題提供がなされる。

また、受講生に対しては、以下のポイントに沿って学びや気づきを深めるように教示される。①心理学に関連する職業とその内容、②心理学に関連する専門職に必要とされる知識や技能、③心理学の専門職に就くにはどのような準備が必要か、④心理学の専門職に就くことで得られる喜びや苦勞、その職業に就くことで得られる人間的成長、⑤在学中にどの

ようなことを学び、準備しておけばよいか。このように、心理学に関連する職業、心理の専門職に必要な知識や技能、心理学の専門職に就くにはどのような準備が必要かなど、大学での心理学の学びを将来の職業や仕事に活かすための視点を学ぶことが目指されている。

3 キャリア教育としての「職業としての心理学」の意味

「職業としての心理学」は、自分の生き方を考えながらその生き方に応じた心理学の学びを選択することができるようになり、主体的・創造的に自分の人生を設計していく力を身につけるということが目標とされているので、学生の社会的・職業的自立に資するキャリア教育としても重要な役割を担っている。

キャリア教育は、子どもや若者の社会的・職業的自立に向けて、一人ひとりのキャリアを形成するために必要な能力や態度を育てることを通してキャリア発達を促す教育であり、キャリア形成あるいはキャリア発達を促すために必要な能力や態度を、発達段階に沿って計画的・継続的に育てる活動である。また、キャリア教育によって、子どもや若者にどのような「力」が身についたのか、そのための教育活動は効果的であったかどうかを評価する必要があり、キャリア発達を促すために必要な能力や態度を測定した結果を指標として、キャリア教育のカリキュラムやプログラムを評価することが求められている。

その一方で、「職業としての心理学」は、本学の心理学科の卒業生および大学院心理学専攻の修了生から、いわゆる「職業人講話」をしていただくものであるため、受講生にとってはキャリア・モデルに出会うよい機会であるとともに、「人生の転機」への対処について気づきや学びを得る機会でもある。たとえば、「好きな仕事だからここまで続けられた」「つきたい仕事や職業に就くために努力をしたので目標が達成できた」など、失敗や挫折の経験がほとんどない人生を送ることもあれば、自分の過去を後悔したり、もう一度やり直したいという思いにかられたりすることも稀ではない。人生には思いがけない出来事が突然に起きたり、計画が予定通りに進まなかったり、まったく望んでいなかったような失敗や挫折を経験することがあるが、これらは人生の転機（トランジション）と呼ばれ、それを節目にして人生の方向性が大きく変わることがある。しかしながら、後になってその出来事や今日に至る過程を振り返って見たときに、「あの大変で困難な出来事が

あったからこそ、今の自分がある」と、その意味を肯定的に受け止めることができることもある。

「人生の転機」をどのように受け止め、どのように乗り越えたか、過去から現在に至る状況をどのように理解し自分にとっての意味づけをどのように行ったか、出会いや偶然をどのように作り出し、その転機をキャリア形成につなげたか、自分の強みをどのように認識し、周囲の人々からどのような支援を受け、どのような戦略を立ててその状況を乗り越えたかなど、人生の「物語」が、「転機をどう生きるか」について重要な気づきや学びの機会につながる事が期待される。

4 本研究の目的

キャリア教育の実践が、その教育目標を達成するためには、キャリア教育の効果について適切な評価を行うことが必要である。また、キャリア教育における評価には、キャリア教育のカリキュラムやプログラムの評価と、キャリア発達を促進するために必要な能力や態度の発達に関する評価とがあるが、キャリア教育としての「職業としての心理学」によって、学生にどのような「力」が身についたのか、その取り組みは効果的であったかどうかについても評価する必要がある。

本研究では、2016年度春学期に開講された「職業としての心理学」のキャリア教育としての効果を検証することを目的にして、「キャリアデザイン力尺度」(三川ら, 2015)と「課題レポート」の記述内容の2つの指標を用いて検討を行う。

方 法

1 調査対象者

2016年度春学期に開講された「心理学総合科目」(職業としての心理学)を受講した学生を対象とした。調査票の有効回答数は、第1回の授業において回答したものは120名、第15回目の授業で回答したものは85名であった。また、第15回の授業の課題レポートを提出した学生は60名であった。

2 調査方法とその内容

「心理学総合科目」(職業としての心理学)では、第1回の授業と第15回(最終回)以外は本学の心理学科の卒業生および大学院心理学専攻の修了生を講師として招き、いわゆる「職業人講話」を行っていた。なお、2016年度に登壇した卒業生・修了

生の職名や職域については表1にまとめた。

「職業人講話」によって構成される「職業としての心理学」の授業の前後における受講生のキャリア意識の違いを検討するため、授業の第1回（「事前」と表記）と、第15回（「事後」と表記）の2度にわた

り、「キャリアデザイン力 チェックシート」と表記した調査票を一斉配布して実施した。調査票は授業時間内で回答するように求め、授業の終了後に回収した。また、課題レポートについては、第15回の授業で課された小レポートを分析の対象とした。

表1 2016年度 登壇者一覧（所属・職名・職域など）

授業日	登壇者(敬称略)	所属	職名	職域など
4月13日	大畑 豊	一般開業(相談ルーム)	カウンセラー/講師	教育相談・SST・発達支援
4月20日	榎並 小百合	地方公共団体(子ども相談課)	心理相談員	子育て支援・虐待予防・心理相談
4月27日	岡本 貴弥	医療・福祉系専門学校	教員	専門家養成・精神保健福祉
5月11日	中西 誠	大学/企業/指導施設	研究員/講師	交通違反講習・発達研究
5月18日	佐藤 仁孝	公共職業安定所/刑務所/NPO法人	職員	就労支援・公共事業受託
5月25日	清水 碧美	地方公共団体(教育センター)	相談員	発達相談・教育相談
6月1日	大台 賢史	地方公共団体(教育委員会)	スクールソーシャルワーカー	スクールソーシャルワーク
6月8日	鳥井 崇行	NPO法人	理事長	不登校支援・発達支援
6月15日	岩佐 浩	検診事業を扱う一般財団法人	カウンセラー	健康促進事業・メンタルヘルスケア
6月22日	黄瀬 敦美	保育園(企業)	保育士	発達支援・保育
6月29日	篠倉 拓也	地方公共団体(家庭支援センター)	カウンセラー	養護施設退所者支援・DV同伴児童
7月6日	森川 なつ花	精神科クリニック	心理士	精神科外来・心理検査・事例検討
7月13日	有森 修三	刑事施設	処遇カウンセラー	再犯防止プログラム・グループワーク

調査内容

1. キャリア教育の効果の指標－「キャリアデザイン力尺度」

本研究では、三川ら（2015）の作成した「キャリアデザイン力尺度」を指標として用いた。この尺度は、高等学校のキャリア教育・職業教育の効果を測定するために開発され、高校生3,192名のデータを基に、因子分析によって5因子（社会形成力・リーダーシップ力・自己理解力・問題解決力・職業理解力）を抽出した後に、各6項目ずつを選択したもので、「キャリアデザイン力 チェックシート」として活用できるように工夫されている。また、各尺度の信頼性は.798～.834と十分に高かったことが報告されている（三川, 2015）。

「キャリアデザイン力尺度」の5つの下位尺度の内容は以下の通りである。

- ①**社会形成力** 自らの役割や選択に責任を持ち、周囲の状況や、社会的なマナーやルールをふまえて行動するなど、社会人としての自己を形成するために必要な能力。
- ②**リーダーシップ力** 自分から進んで行動し、気持ちや意見を発表するなどのほか、人に対しても積極的に働きかけて理解や協力を得ようとする能力。

- ③**自己理解力** 自分がどのようなことに興味があり、どんな人生を送りたいのかを理解し、その理解を将来の目標や職業の発見に活かしていくことのできる能力。
- ④**問題解決力** 問題や困った事態に直面したときに、意見や情報を集めて理解したり、状況の分析を行いながら、効果的な取り組み方やよりよい解決策を工夫する能力。
- ⑤**職業理解力** 職業や資格の種類、またそれぞれの職業に就くために必要な能力や知識を知るなど、目標とする職業に就くための進路選択を考えていくために必要な能力。

3. 授業レポート

心理学総合科目「職業としての心理学」において、毎回の授業で課している「小レポート」の記述内容を分析の対象とした。本研究では、第15回に課した「これまでの講義で得られた学び、気づき」をテーマとした小レポートの記述を検討した。

結果と考察

1 「キャリアデザイン力尺度」の信頼性と構造

「キャリアデザイン力尺度」の信頼性（内的一貫性）を検討するために、事前のデータを基に α 係数を算出したところ .749～.844と十分に満足できる値が得られた（表2）。

また、「キャリアデザイン力尺度」の構造を確認するために、下位尺度における事前および事後の相関係数を算出してその結果を表3および表4に示したが、事前・事後ともに、すべての下位尺度について1%水準で有意な正の相関がみられ、「キャリアデザイン力尺度」の下位尺度は相互に関連していることが示された。

授業の前後における「キャリアデザイン力」の変化

授業の前後における「キャリアデザイン力」の変化を検討するために、事前および事後において「キャリアデザイン力尺度」の下位尺度の平均と標準偏差を算出し、事前・事後による平均の差をt検定によって検討した結果を表5に示した。

その結果、「1 社会形成力」と「5 職業理解力」に5%水準で有意な差がみられ、事後の平均が高いことが示された。これは、「職業としての心理学」の受講によって「1 社会形成力」と「5 職業理解力」が高まっていることを示唆している。

すなわち、「自らの役割や選択に責任を持ち、周囲の状況や、社会的なマナーやルールをふまえて行動するなど、社会人としての自己を形成するために必要な能力」（社会形成力）と、「職業や資格の種類、またそれぞれの職業に就くために必要な能力や知識

表2 「キャリアデザイン力尺度」の内的一貫性 (N=120)

下位尺度	項目数	α 係数
1 社会形成力	6	.749
2 リーダーシップ力	6	.823
3 自己理解力	6	.758
4 問題解決力	6	.828
5 職業理解力	6	.844

表3 「キャリアデザイン力尺度」における相関係数 (事前 N=120)

下位尺度	社会形成力	リーダーシップ力	自己理解力	問題解決力	職業理解力
1 社会形成力	-	.446 **	.439 **	.686 **	.525 **
2 リーダーシップ力		-	.472 **	.437 **	.341 **
3 自己理解力			-	.446 **	.616 **
4 問題解決力				-	.412 **
5 職業理解力					-

** : $p < .01$

表4 「キャリアデザイン力尺度」における相関係数 (事後 N=85)

下位尺度	社会形成力	リーダーシップ力	自己理解力	問題解決力	職業理解力
1 社会形成力	-	.440 **	.397 **	.598 **	.449 **
2 リーダーシップ力		-	.450 **	.445 **	.343 **
3 自己理解力			-	.639 **	.545 **
4 問題解決力				-	.471 **
5 職業理解力					-

** : $p < .01$

表5 講義前後における「キャリアデザイン力」の変化

	事前(N=120)		<	事後(N=85)		t値
	平均	SD		平均	SD	
1 社会形成力	17.38	2.922	<	18.34	2.524	-2.465
2 リーダーシップ力	14.36	3.766		15.39	4.053	-1.869
3 自己理解力	16.53	3.750		17.02	3.713	-.926
4 問題解決力	17.48	3.569		17.99	3.591	-1.012
5 職業理解力	13.17	3.628	<	14.32	3.289	-2.325

< : $p < .05$

を知るなど、目標とする職業に就くための進路選択を考えていくために必要な能力（職業理解力）は、「職業としての心理学」を受講することによって向上していると考えられる。

レポートに記述された「キャリアデザイン力」の変化

第15回の授業に出席し、課題レポートを提出した60名について、レポートに記載された内容を検討した。第15回では、第1回目と同様に「キャリアデザイン力 チェックシート」が実施されたが、学生自

身が保管していた事前の結果と事後の結果を比較し、レポートにその変化について記述していた学生が少なからずいた。

この点に注目し、授業の前後における「キャリアデザイン力」において向上がみられた「1 社会形成力」と「5 職業理解力」に焦点を当てて、学生の学びや気づきを検討することにした。

まず、学生が記述した自分自身の「キャリアデザイン力」の変化に基づいて、表6のように分類した。

表6 学生自身が振り返った「キャリアデザイン力」の変化 (N=60)

内訳	人数(人)
「社会形成力」と「職業理解力」の双方を含む能力が向上	11
「職業理解力」を含む能力が向上	8
「社会形成力」を含む能力が向上	1
上記以外	8
変化に関する言及なし	32

レポートを提出した学生の約3分の1が、自主的に「1 社会形成力」と「5 職業理解力」の変化についてレポートに記述していた。このことは、学生が「キャリアデザイン力」のうち、「自らの役割や選択に責任を持ち、周囲の状況や、社会的なマナーやルールをふまえて行動するなど、社会人としての自己を形成するために必要な能力」（社会形成力）、「職業や資格の種類、またそれぞれの職業に就くた

めに必要な能力や知識を知るなど、目標とする職業に就くための進路選択を考えていくために必要な能力」（職業理解力）の向上を実感していることを表しているものと思われる。

また、学生が記載したレポートにおける「5 職業理解力」に関する記述内容をKJ法によって分類すると、3つの内容に分類することができた。その分類を表7に示した。

表7 学生のコメントから抽出されたカテゴリー

内訳	人数(人)
心理学の活用域の広さ	16
心理職に対する幅広い理解、印象の変化	15
職業選択における展望の獲得	20

第一は、「心理学の活用域の広さ」である。

「15回の授業を通して学んだことは、どんな職業に就いても、学んだ心理学は活かせるということです」「これまでに受けた講義を思い出すと、心理学を学んだ上ですごくたくさん選択肢があるんだなと思いました」「心理学が様々な現場で幅広く応用されていることを知り、心理学の重要性を改めて感じました」などの意見にみられるように、幅広い領域で活躍している心理学関連領域の卒業生の話を聞くことによって、心理学が心理臨床を専門とする職業にとどまらず、医療や福祉、産業、教育、司法といった関連領域にも大きく寄与していることが理解されたものと思われる。

第二には、「心理職に対する幅広い理解、印象の変化」である。

「私の中のイメージでは、カウンセラーは学校や病院や会社などで働いたり、個人経営をしていると思っていたので、もっと色々あって幅広いのだということがわかりました」「心理職って何があるの？と聞かれた時に答えられなかったことを考えると、だいぶ成長し、知識を吸収できたかなと思います。心理＝カウンセリングという定義しか知らなかった私にとっては世界が広がった」「心理学を活用した職業はスクールカウンセラーや精神科クリニックなどの職業しか思い浮かばなかったのですが、保育士やハローワークで働いている方など、驚きがたくさん

ありました。最初に思い浮かんだスクールカウンセラーや精神科クリニックについても自分が想像していたものより、はるかに業務内容が多くてその点についても驚きました」などの意見にみられるように、心理職としてイメージできる職種や業態が拡大するとともに、実際の業務内容を聞いたことにより、さらにイメージが明確になったことが示された。また、「たくさんのごことを経験して後悔し、学び、それを経ての言葉というのは一つ一つに重みがあった」という意見にもみられるように、職業人としての卒業生の講話は現実的な教訓としても受け取られたのではないと思われる。

第三には、「職業選択における展望の獲得」である。

「心理の専門職に就かなければならないのかと思っていたが、これからは心理を生かせる職業について考えたい」「心理学を学べば学ぶほど職の幅が広がり、選択肢も増える、といったことも感じることができました。(中略)せっかくこの学部に入って、学べるものがたくさんあるのなら、それを生かして将来生かせる生き方ができれば、と思うようになりました」「この大学で学んだことを、今後の職業に活かせるように、今自分ができる精一杯のことができるように、あがいてみたい」という意見等にみられるように、多様な職業に触れることで、心理学部で学んだことを職業としてどのように活かしていくかについて考え、実行しようという姿勢が形成されているように思われる。

また、「心理学を専門とする分野の職業に就かなくとも、今やっていることは無駄ではないのだと思えた」「臨床心理士になるために心理学部に入ったわけではないけれど、卒業生のお話を聞いて専門家にならなくても、学んだことが無駄にならないことが分かってよかった」といった、学生としての学びを再定義し、新たな意味づけを見出したという意見もあった。

さらに、「様々な職業について調べて、少しでも興味が引かれたものはインターンシップ等が実施されていないか調べて、積極的に取り組んでいけば、本当に就きたい職業がわかって、自己理解や職業理解の向上につながっていくのではないと思われる」「就活についてもまだ2年だと思っていたのですがまだまだ知らない職業があるという事、なりたい職に必要な資格、それまでの経験などを決めていき、4年には万全の体制で臨めるように今から頑張っていきたいです」「私は、スクールソーシャルワーカーになることが将来の夢です。夢を叶える為に、(講師

が在籍する)専門学校に入学し精神保健福祉士の資格を取得したいという新たな目標もできました」といった実際的な行動やプランを思い描いていた受講生がいたほか、「この授業を受けたことにより、今行っているボランティアに出会うこともでき、自分の夢に近づく大きな一歩を踏み出せたように思います」「私には将来心理職に就きたいという夢がある。大学時代の間は何をしておくべきなのかなど具体的なお話を聞くことができ、私も将来の夢のために何をしておくべきなのかということを改めて考えるようになり、行動に移すことが多くなった」という意見のように、授業を通して卒業生との交流を深めるなどの実際の行動に進めていこうとする受講生がいることも示された。

レポートに記述された「人生の転機」

また、レポートでは、「人生の転機」に直接に言及しているものと、キャリア形成に必要な力としてのコミュニケーション能力に焦点を当てた記述が見られた。

「人生の転機」について言及した記述には、「みなさんそれぞれの人生の転機があり、ずっと心理士を目指していたわけではなかったことが驚きだった」「いろんなことがあって今の働かされている職場に就職することになったという方が多くて、そのようなお話をお聞きしていると、人生って本当に何かあるかわからないととても感じた」など、登壇者のキャリアが「つきたい仕事や職業に就くために努力をしたので目標が達成できた」というような順調な歩みではなかったことに驚きや人生の不確実さを感じたという意見がみられた。

また、登壇者がどのように転機を引き起こし、意味づけをしたかという点については、周囲の人の支えやサポートといった対人関係のほか、自分自身の考え方が大切な要素となると感じており、「ボランティア先で、実習先で、大学で、多くの人と会って、ちょっとしたことがきっかけで職に就いたり、専門性を発揮したり、コネというよりも人との関係が偶発性をもたらしていたのではないかと考えた」「人生の転機をよい転機にするには、自分自身の考え方一つで左右できるものなのかもしれない」「初めから未来は決まっているのではなく、自分がどう行動するか、誰と出会い、影響を受け、どう受け止めるか、どれだけ努力ができるかで、いくらでも未来を創りあげることができる。しかし、私たちは一人で生きているのではなく、人生のたくさんの転機、

困難にぶつかった時には、周囲の人から知恵と力を借り、乗り越えていくことが大切である」「人生の転機を受け止めて、乗り越えるためには自分の努力や周囲のサポートが必要になると考えました」などという記述もみられたほか、J・クランボルトの「計画された偶発性」(planned happenstance)に言及して、「『計画された偶発性』の中で、私に足りないのは柔軟性とリスク・テイキングなのだ」と今期を通して感じ、意識して改善していこうと思いました」という意見のように、自らに足りないものを感じ取ったという受講生もいた。

コミュニケーション能力に焦点をあてた記述の中には、「1年生の時の授業でも聞いたように、企業が求めているのはコミュニケーション能力を持っている人です。ということは、今企業側は採用するにあたり人を見て決めているんだということが分かりました」「共通しておっしゃっていたのは、コミュニケーション能力を身につけることや、色々なことに挑戦することであった。社会に出れば、今のように自由はないので、時間のあるうちに、バイトやボランティアや遊んでおくといっておっしゃっていたのが印象的だ。こうした活動を通じて、コミュニケーション能力を向上させるのが大切だと学んだ」「人事の方にフィードバックをいただいた時に『一緒に気持ちよく働けるような人を探している』と言われ、確かにそのためにはコミュニケーションは大切だよなあと感じました」といった意見にみられるように、これまで受講してきた授業や就職活動の経験を通して見聞きしていたコミュニケーション能力の重要性が、職業人である登壇者からのメッセージを通して、より深く印象付けられたようである。

結びとして

キャリア教育の実践が、その教育目標を達成するためには、キャリア教育の効果について適切な評価を行うことが重要である。本研究では、キャリア教育としての「職業としての心理学」によって、学生にどのような「力」が身についたのか、その取り組みは効果的であったかどうかを評価するために、2016年度春学期に開講された「職業としての心理

学」の効果を検証することを目的に、「キャリアデザイン力尺度」と「課題レポート」の記述内容の2つの指標を用いて検討を行った。

その結果、「職業としての心理学」の授業によって、受講生の「自らの役割や選択に責任を持ち、周囲の状況や、社会的なマナーやルールをふまえて行動するなど、社会人としての自己を形成するために必要な能力」(社会形成力)、「職業や資格の種類、またそれぞれの職業に就くために必要な能力や知識を知るなど、目標とする職業に就くための進路選択を考えていくために必要な能力」(職業理解力)が高まることから、キャリア教育としての効果が検証されたと考えられ、授業のたびに提出する「小レポート」の記述によっても、それらの能力の向上を確認することができた。また、卒業生による「職業人講話」は「人生の転機」の受け止め方や対処の仕方のほか、コミュニケーション能力の重要性を認識させることにつながったといえよう。

「職業としての心理学」は、自分の生き方を考えながらその生き方に応じた心理学の学びを選択することができるようになり、主体的・創造的に自分の人生を設計していく力を身につけるということが目標とされているが、本研究の結果はその効果を示しており、キャリア発達を促すために必要な能力を育てるキャリア教育の取り組みとしても評価されるものと思われる。

謝 辞

本研究における調査データの分析等については、大学院心理学研究科の修了生の前田雄一君にお世話になった。記して謝意を表明します。

引用文献

- 三川俊樹・石田典子・神田正恵・山口直子 2015
高等学校におけるキャリア教育・職業教育の効果に関する研究(2)－キャリアデザイン力尺度の再検討 追手門学院大学心理学部紀要、第9巻、69-84.